

中国貨幣の歴史

18 商品・貨幣経済発展のなかで通用を続けた「開元通宝」—唐代後期の貨幣—

(当十銭)

(当五十銭)



けんげんじゅう
乾元重宝

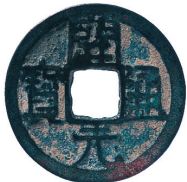
「安史の乱」期の財政対策として財政家・第五琦の提案により乾元元～2年(758～759年)に新鑄された。「開元通宝」10枚相当の「当十銭」、50枚相当の「当五十銭」の2種類が発行されたが、穀物価格の騰貴など混乱を招いたため通用価値が相次いで引き下げられ、宝応元年(762年)には「開元通宝」と等価とされ、器物などに鑄潰されたとされる。



たいれきげんほう
大曆元宝

けんちゅうつうほう
建中通宝

八代代宗の大曆4年(769年)、九代徳宗の建中元年(780年)に鑄造された。いずれも「開元通宝」の文字を削って「大」・「曆」や「建」・「中」の文字を嵌め込んだ母銭によって鑄造されたが、残存しているものが少ないため鑄造量も少なかったと考えられている。



(表面)



(裏面：昌)



(裏面：京=京兆府)



(裏面：廣=廣州)



(裏面：潭=潭州)



(裏面：越=越州)

かいしょうかいげん
会昌開元

十五代武宗(840～846年)が仏教勢力を弾圧した際に、仏像や鐘を原料として会昌5年(845年)に鑄造された「開元通宝」。当初は、裏面に年号を表す文字(昌)を記したため「会昌開元」と呼ばれるが、その後は鑄造地の州名が記された。

唐代後期には、「開元通宝」以外の大銭などが鑄造・発行されたことがあったが、「開元通宝」が一貫して銭貨として流通した。商品・貨幣経済の発展に伴い、高額・遠隔地取引では金・銀の使用も拡大したとされる。また、銭貨需要の増大に供給が追いつかず銭貨不足状態にあったため、100枚未満の銭貨を100文(銭)として通用させる「省陌慣行」が生まれた。

(写真は全て実物×100%)

唐の六代^{げんそう}玄宗（712～756年）の末期、重用されていた楊貴妃一族との対立から、地方軍司令官（「節度使」）の安祿山^{あんろくざん}らが起こした反乱（「安史の乱」、755～763年）を契機に、王朝は弱体化していく。統制面では、710年、異民族進出に備えて辺境に置かれた節度使が安史の乱を経て全国に拡大されると、地方の実権は彼らに握られるようになり、中央政府内でも宦官^{かんがん}が皇帝の廢立を勝手に行うなどその専横は顕著となっていく。

反乱平定等に伴う軍事支出の増大等に対しては、財政建て直しのため増税や大銭の発行など種々の改革を進める。八代代宗^{たいそう}（762～779年）の頃に確立した塩の専売制は莫大な利益を生み、また780年に導入された「兩税法」^{りょうぜいほう}により租税収入は大幅に改善したが、国庫収入は盛時には及ばなかったとされる。兩税法は、玄宗の頃からの増税等による均田農民の没落・租庸調収入の激減と莊園など大土地所有の進展を受け、人（丁男）単位で等しく土地を与え等しく課税（物納）する租庸調制に代え、大土地所有を公認し、家（戸）単位で土地などの資産に応じて主として銭で徴税（年2回）するものであった。

こうした改革は富商・富農らの大土地所有を進展させ、また、水陸交通の発達の中なかで農産物、手工業品などの商取引が活発となり、大都市にとどまらず小都市でも市が広範に開かれるなど商品・貨幣経済の発展を加速させた。都市での消費は、富裕層だけでなく一般市民層にも浸透したとされる。なお、王朝弱体化の中なかでの経済発展は、農業生産力の向上が著しい揚子江下流域の穀倉地帯を係留できていたことが背景とされている。

貨幣をみると、「開元通宝」が唐代を通じて流通した。「安史の乱」期の財政対策として、「開元通宝」10枚あるいは50枚に相当する大銭「乾元重宝当十銭」（758年）、「乾元重宝当五十銭」（759年）が鑄造・発行されたが、流通の混乱を招き短命に終わった。その後、「開元通宝」の「開」・「通」の文字を「大」・「曆」や「建」・「中」に嵌め置きした「大曆元宝」^{たいれきげんぼう}（769年）、「建中通宝」^{けんちゅうつうぼう}（780年）が鑄造・発行されたが、残存が極めて少なくどの程度流通したのか明らかではない。十五代武宗（840～846年）の代の「会昌開元」は、裏面に鑄造地を示す文字を記した「開元通宝」である。当時、銭貨需要の増大に供給が追いつかず銭貨不足の状態にあったため、鑄造地を記させて「開元通宝」の品質維持に責任を持たせたとされる。

唐の後期には、銭貨不足に対応し、85文や80文など100枚未満の銭貨を100文として通用させる「省陌」^{しょうぼく}と呼ばれる慣行が生まれた。また、遠距離商業の発展に伴い銭貨搬送を回避する手段として「飛銭」^{ひせん}などの送金手形が発生したほか、商人らによる高額取引などでは銭貨に比べ搬送が便利な金・銀の使用が拡大した。

こうした商人らが活躍するなか、台頭した塩の密売商人である黄巢^{こうそう}らが塩の専売制などで苦しむ農民を組織した「黄巢の乱」（875～884年）が起こり、その混乱の中なかで唐王朝は滅亡することとなる。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

【参考文献】

- 加藤 繁、『支那経済史考証』上・下、東洋文庫、1952・1953年
——、『唐宋時代に於ける金銀の研究』分冊第一・第二、東洋文庫、1925・1926年
日野開三郎、『日野開三郎東洋史学論集 第5巻 唐・五代の貨幣と金融』、三一書房、1982年
山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年
山岡直人、「中国貨幣の歴史17「開元通宝」の誕生—唐代前期の貨幣—」、『金融研究』第26巻第1号、2007年